

* 日本・アジアのキリスト教 * * * * *

< 2006年度・テキスト >

植村正久 『真理一斑』(1884年)(『植村正久著作集4』新教出版社)

< 目次 >

第一章 宗教を総説す その一

第二章 宗教を総説す その二

第三章 宗教の真理を講究するに必要な精神を論ず

第四章 神の存在を論ず その一

05年度

第五章 神の存在を論ず その二

第六章 神と人との関係を論じ併せて祈祷の理を説く

第七章 人の霊性無窮なるを論ず

06年度

第八章 イエス・キリストを論ず

第九章 宗教芸術の関係を論ず

< 真理一斑の基本性格および構成 >

・キリスト教の弁証

宗教一般からキリスト教へ

・キリスト教的宗教哲学、とくにイギリス系のスタイル

・現代(近代)そして日本(明治日本)という状況において

近代科学、東洋思想

・構成

宗教の概念規定(第一章、第二章)

人間は本質的に宗教的である、宗教は人間の核心的な問題である

信仰対象(神) - 神と人間 - 人間

宗教理解のための方法論(態度・心構え)あるいは認識論(第三章)

神論(自然神学あるいは宗教哲学)(第四章、第五章)

無神論論駁、有神論の擁護

神と人間(創造、摂理、宗教経験・祈祷)(第六章)

人間論(魂、来世)(第七章)

キリスト論(第八章)

文化論(キリスト教と文化)(第九章)

< 前年度の要点 >

A . 第一章 宗教を総説す その一

1 . 明治以降の日本の宗教状況における宗教論の意義

「今やわが邦人が宗教の弊に懲りてこれを度外に措くの傾向あるいは、いづくんぞその輕蔑する宗教の迷妄よりも更に大なる迷妄ならざるを知らんや」

2 . 人間は宗教的である

「蓋し人類は宗教的の動物なるがゆえに」

「未開の人民には宗教の發育未だ十分ならざるにより」「世の輕躁なる論者は、かかる事實をもって宗教を非難するの資に充てんとするならん。しかれども吾人はこれをもって宗教の人心に切要なるを証せんと欲するなり」

3 . 宗教の意義（個々人の経験に訴え、思想史の実例を示す）

「撲滅すべからざる天然の崇敬心に根ざすものなりとす」

「我いずれの所よりか来たれる、我何のためにしてか存する、我いずれの所にか行く。この三問題は人類をして吾人の講究せざるを得ざるものなり」

「読者は世上の事物煩擾なるに紛れ」「謹厳なる人生の疑題を究察せざるがゆえに、この宇宙に住みて宇宙を知らず。ゆえにかかる思想を理会せざることもあらん。しかれども暫くの間、危座、正念して、自己の状況を静思せよ」

「これ至大の問題にあらずや」

「フランスのパスカル曰く」

「吾人の脆弱、短命なるを悟るときは、全能なる永住者を想わざるをこと能わず」「無限者にあらざれば、わが心の望み遂ぐるに足らざるなり。この無限なるものとは何ぞや。この絶対なるもの、いずれの所に在るや」「吾人の本務は、討尋して、真理のいずれに存するやを求むるに在りとす」

4 . 今後の議論の方向性について

「知らず識らず眼を無限の境に放ち、望みを超理の郷に属するに至る」

「人類の良心及び罪惡の觀念は宗教を生起するにおいて、大いに力ありしものなりと論ず」

「万物の原因を探るを本色とする宗教の起これる一原因なり」「宇宙の原因論に直進して止まず」

5 . 結論

「宗教は意識の実験なるがゆえに全く論理学の攻撃し及ばざるところなり」

B . 第二章 宗教を総説す その二

1 . 世界から世界を超える存在者へ

「見ゆる世界は見えざる世界と聯結して初めて全きを得べし」

「我を助くる超理の郷いづくにか在る。宗教の必要ここにおいてか起こるものと言うべし。古より東西諸国には多くの聖賢世々に輩出し、宗教の真理を講究して人生の疑題を解説せんと企てたり」

「吾人この世の形勢を熟察し、心意の向こう所を考うるに、無限の境全備の地のあるを望まざるを得ず。蓋し万有は万有を超越するものを須って初めて完璧となるを得べし」

「宗教の道理は人生の関するところ極めて大いなるものなり」「人だれかよくかかる思想

を免るることを得ん」「余は己れの果敢なきを知らざる屠所の羊たらんよりは、むしろこれを知るの人たらんと欲す」「わが果敢なきを知るは、尊貴なる事なり」「ミル」

2. 人間は無限を知りうるか

「人の尊貴なるを知らしめずして、その禽獸に近きを見せしむると。その微弱なるを示さずして、その尊大なるを知らしむると、二者大いに異なりといえ、その害なること一なり」「人類の分を忘れ、倨傲なる思想を逞ししょうするものにして、我の何たるを知らざるに坐するのみ」「ペーン、ヴォルテール者流の議論すなわちこの範囲に属す。西欧にてはかかる非キリスト教的論全くその跡を斂めたるにはあらねど、人智の分限を知覚すること昔日に勝れりと言わざるをべからず。世に、わが日本国においては、宗教の議論は大抵ボルテールとペーン等の範囲に在るを見る」

3. 不可識論に対して

「ヒューム、ハミルトン、コント等を経て、スペンサーに至りて、その高点に達し、ついに宗教をもって一切不可識の部に抛却することとはなれるなり」

「謙遜とはいかなることぞや」「これ不可知的の区域に属すと断言するを、真正の謙遜とするか。真正の謙遜は造化無尽蔵の真理に関し、妄りに是非を断言することを好まざるものなれど、また、妄りに真理を放擲するにあらざるなり」「実際は甚だ倨傲なるものなり」「もし人をして全く無限的のものを知ることなからしめば、あによく己れにこの識力なきを覚らん」「これを觀れば、不可識論なるものは、わが知見完全ならずといえる事実を附会し、牽強して、その説を立てたるものなり」

「ヨブ記」「釈迦」「プラトン」「ユスティノス」「ネアンダー」「孔子」「ソクラテス」「東西二聖の感ずるところ蓋し大同小異なりしと思わる」

C. 第三章 宗教の真理を講究するに必要な精神を論ず

「宗教の講究に必要な精神を養わんと欲す」

一 懷疑の性質を明らかにすべし

「疑惑は哲人の至らんと期する最後の極所にあらず、すなわち明確なる真理を覚知する門路のみ」「真正の懷疑者」「虚妄なる懷疑者」「安易に疑いを懐きて毫もこれを苦慮せず、危疑未定の間に心安んぜんと欲するものあるこそ最も怪しむべきことなれ。この不正なる精神」「懷疑の質」

「奇怪の説」「しかれども宗教の事に関し、一種の疑惑を懐き、これを論ずるを好まざるものは、みな実際にこの説を持するものなり」

「真正の疑惑は余の鼓舞するところのものなり」

二 先入の妄見に圧倒せられず、慣習の治下を脱せざるべからず

「多くの意見は知らず識らずすでに先入して、わが心内に主たるを免れず」「汝ら幼児のごとくなるにあらずんば」「吾輩はこの国に生まれ、習慣よりして許多の弊を被ぶれるものなり。なかんずく宗教を治具と見做し、毫も良心に係われる真理あることを知らず」

「読者もし十分にキリスト教を究察せんと欲せば」「私見、臆度のために真理の明を蔽わしむるなかれ」

三 真理を敬崇して、これに忠義なる志操を培養せざるべからず

「真理は風流韻事をもって視るべきものにあらず」

「姑息の情に溺れて、かかる忠誠の心志を起さざるときは、読者が真理を看破せんことは望むべきにあらざるなり。試みに思え、吾人のさきに得たところの真理の一斑、すなわち具足せざるの真理、否誤謬を切断し去るも、これが全豹を保持し得なば、これ反って勝れる事にあらずや。わが今日の意見にして、実に至大の真理を受くるに障碍を与うるものならしめば、一刀両断して、これを振り棄てよ。これ道に忠なる士の本分なりとす」

「組織のために真理を犠牲に供するの過失」

「吾人は急遽小成の思想を貫徹するに汲々たらず。いやしくも真理のために、わが旧思想の四分五裂するを忌むべきにあらざるなり」「吾人真理を得るを能わずんば、一日も安居すること難し」

四 宗教の真理を知らんと欲するものは、須らく意想の上に安んぜず、みずからこれを実践するの気風なかるべからず

「学者思想家の通弊は、事実に思いを注がずして、事実の意想上のみ、心を用うることなり」「行なうこれを知るといふべし」「わが知る所をして、意想のうちに死なじめず、これを実際に活用するときは、ついに宗教の大理を悟り、わが信仰盤石の上に堅固なるを覺らんとす」「カーライル」「汝に最も近く迫れる義務を尽くすべし。さすれば次に行なうべき義務は、随って明瞭なるに至らんと」「靈魂の実験にあらずや」

五 徳性を涵養しわが現状を視察すべし

「真理の無尽蔵なりと」「単に智力をもってこれを知ること難し」「徳性の協力するを待ちて知ることの、始めて全きものは宗教以外にもその例少なからざるなり」

「ニューマン」「パスカル」「ヒューム」

「徳性を養い、至情を鼓舞して、智力の勢いを援くるを要す」「目覚めたる良心に導かれて」「読者神の存在、未来の理、イエスの神たることその他宗教の大端は、単独の知力をもって悟り得べきにあらず。みな各自の良心の渙発するにあざれば、知り難き真理なり」

良心の意味、宗教的真理は論理的な証明の事柄ではない

いわゆる神の存在論証ではない

D. 第四章 神の存在を論ず その一

「神の存在は天下万教の基趾なり」「キリスト教有神論の概要」

一 無神論決して容易にあらず

「天下神なしと言うほど難きこと有らざるなり」

「吾人もし真正の無神論を唱うるに至らば、敢えて生命をも物憂く思うべきはじなれど、その実際は仮面の無神論者にして、口に論ずるほど心には確と神なしと思うにあらず」

「証拠を検定して、神の存在を認識するか、もしくはその証拠の見ざるゆえにその存在を知らずと言うこと」「神の存在を証せんには、僅かに宇宙の一小局部にてもその証拠とす

べきものあらば足れり。しかれども純然たる無神論を左証せんと欲せば、その際涯を究めがたき宇宙をことごとく究察せざるべからず」「無神論を唱うるに有神論に比ぶれば、更に困難なるものありと言わざるを得ず」

二 有神論の倫理を論ず

「宗教の倫理は通常人間の事と帰趣を異にするものにあらず。ただこれを適用する場合に異同あるのみ」「よしや有神論の事実すなわち上帝の存在に関しては、多少分明ならざることもあるべしとするも、その倫理すなわち吾人は、いかにしてこれを事すべきやと言うに至りては、甚だ明白にして火を見るに異ならず」

「蓋し上帝は天地の主、先民の大父にして、吾人は昼となく夜となく、断えずその愛育を被ぶるものなるがゆえに、これをして果して存在せしめんか、すなわち心を尽し、精を尽くしてこれを愛すべきこと、もとより論ずるを待たず」

「該家の人が倫理上の義務を負担するは、無名氏の所在を知るときに始まるか、或いは未だこれを詳知らざる時にも及ぶものとするか、余は未だこれを知らざる時にも関係する所少なからずと信ずるなり」「果して上帝をして存在せしめんか、大いに吾人倫理上の義務に関係すと言うべし」「吾人はすでに未知の上帝に対して不虔の罪を負うこと必ずしもこれなしと言うべからず」「最も切迫なる倫理上の義務なり」「吾人は未知の神に責任を負えるものにて」

三 有神論の起源いづれの所に在りや

「有神論の起源」

「第一 進化説」「宗教をも進化の理にて説き去らんとす」「ヒューム」「コント」「原始一神教」「スペンサー」「不十分なりとの判決」

「第二 天啓説」「神のこと、その他宗教のことは一切天啓に出ずるとなす」「もし人類をして全く神を知るの力なからしむるときは、たとい百の天啓あつても、よく神を知らしめ能わざるなり」

「第三 推究の説」「人類の神を信じたるは、人性に理を推し、万物の由来を究むることより起これることなり」「わが心内の顯示は、人類が上帝を信ずることの由って出る所なり。しこうして天地万物は、神について知るを得べき事物を明らかにするの証左なりと。この言善く余が意を得たるものなり」

「第四 自然の傾向」「生まれながらの傾向ある」「良心の作用」「ゆえに吾人が上帝の存在を証明せんとするは、すなわちわが心内にかくのごとき預想、信認の念あるは、果して客観上これに対合するところの実在者あることとなるやという問題に外ならず」「経験、弁論、証明の工を経ざれば、十分にその本質を顕わすこと能わざるのみならず、これと共に外物の混じり居るを免れず」「ゆえに吾人は推究弁論の工をもって、これを琢磨するを要するなり」

「その信仰は弁証、理論の得て及ぶべきところにあらざるなり。しかれども靈魂は特に信ずることを求むるのみならず、また明知せんことを冀図して止まず」「蓋し己れの知識と信仰とを一に帰せしめんとするは、人心の切なる志望なりとす」

E . 第五章 神の存在を論ず その二

1 . 「紀元前六百年の頃より、諸国の人民究察の精神を發揮し、理学の思想大いに興起せり」「事物の理由及びその由来を講究することを始めたり」「宇宙原始論」「ギリシアの哲学」「西欧の學術世界には天地の原因を論ずるもの絶えず」「ティンダルはベルファースト演説」「スペンサーのいわゆる宇宙に係われる先天の解説に外ならず。彼の無神論者といえどもまたこの範囲のうちに在るものとす」

2 . 「今の學術の開示するところによれば、天地の現状はもとより始めありしものなり」「吾人は開端の原因無きものの連鎖は真正の原因にあらざるを記憶せざるべからず」「カント曰く」「究極に至れば独立自在の原因に遡らざるを得ずと。人心はこの高点に達せざれば、決して満足するものにあらず」「蓋し絶対は一にあらざれば絶対にあらず」「蓋し物の原因なるものは結果を生ずるに合当なる資格を具有するを要す。ライブニッツは、これの理を名づけて合当理由の法則と言う」「吾人はこの天地人物の経綸を觀察して、上帝の聖徳を少しく窺い知ることを得べし」「ハミルトン」「そもそも天地は上帝が自叙の伝記なり」

3 . 不可識論への反論

「アウグスティヌス曰く、我己れの存在せるを確知す」「もし我をして欺かれしむるも、わが存在は動かざるなり」「極端の不可識論は到底維持し難き説なり」

「蓋し不可識論は知識に関したる一種の解説なり」「ヘーゲル」「カント」

「不可識論者曰く、限定は否定なり」「しかれどもこれを上帝の事に適用せんと欲するは、上帝は万物を総合したるものなりとの誤解により起これることなり」「一種の否定限定なりといえども、これを狭小にするものとは言い難し。神はその純全唯一なることによりて、天地人物と全く區別あるものなれど、これがために無限の性を失うにならざるなり」

4 . 唯物論への反論 1

「その論に曰く、天地の現象は必ずしも一つの原因無かるべからず。我物質をもってこれに充つ」

「唯物論者が物質の無始なりとするは、全く無限の臆測なるのみならず、吾人は殆どその反対の左証を得るに至らんとす」「マックスウェル」「ハーシェル」

「進化説なるものは宇宙原始の状態を純一均等と見做さざるべからず」「吾人は運動の起原せる所以の解説を求めざるべからず」

「この勢力に弁別の力及び自ら方向を選び、事を決するの力ありとせんか、これ上帝にあらずして何ぞ」「ニュートン」「これが全体を運用支持するもの無かるべからず」「吾人は造化の運行をもってこれを超理の一大原因に帰せざるを得ず」

5 . 唯物論への反論 2

「人心の現象」

「秩然として条理ある世界」「結局原因」「人工物」

「ミル」「異なる多くの現象が、断え間なく同一の情態を呈するときにはこれをもってその原因と做すを得べし」「会合の法」

「クヴィエ」「カント」

「物体の力、奇遇によりてかかる美妙の工事を成就し得たりという説」「天工と人工とはまた非常に類似せるものにあらずや」「唯物論は、思想の顕象をもって一に頭腦の作用に帰せり」「頭腦をして思想の働きをなさしめんと欲せば、最も巧妙なる方法をもってこれを構造せざるべからず」「計画無く、目的無き盲目の物体が少しにても秩序の紛乱することあれば、その工を成し難き細密複雑の機関を作らんがために、衆多の局部を湊合するを得たりとは、最も解し難き説なり」「これ最も信じ難き奇跡にあらずや」「イリアス」の詩」

「ケプラー」「ガリヤニ」

「カント他の事物より、神の存在を証するに付いては、多少異議を唱えたれど、良心の証左を確信して疑わず」「道德の命令」「良心は上帝の存在を明らかにすと」

「人の徳性に神の徳性に推究し至らんとするのみ」

「快樂幸福の念は決して道念の由来するところにあらず」「ダーウィンのごときはこれをもって交社の性に基づくと言う」「正義道德の念は利害よりも起こらず、経験よりも発せず、人定の法律にも由たざるなり」「真理正道なるものは心より離れて独立するものにあらず。すなわち理性のうちに存するものとす。ひとり正義のみならず、およそ必然の理普遍の道万般の原理は、絶対なる理性のうちに在りて永久不拔なるものなり」「永住者の思想」「上帝の理性」「無上大法の制定者」

「上帝の目的人をして正善ならしむるに在るを示すなり」「人類の思想は道義に在り」

「ドレーパー」「スペンサー」「各その見る所に局して、社会の二大傾向を発見したるのみ。二大傾向とは何ぞや。すなわち進歩及び衰亡瓦解の傾向これなり」「蓋し社会の消長は許多の境遇によれりといえども、徳義の関するところ最も大いなりとす」「道德の消長は社会存亡の起因なり」「人民の歴史はこれによりてその方向を定まるを知る」「真正の徳を養え、真正の義気を興起するの力ある一つの真教無かるべからず」「天命」「道」「良心」

6. まとめ

「余は先ず天地の開端元因の存在を説き、次に造化の経綸を究めて神の聰明なるを示し、第三に、良心に就きて上帝の公義を証明せり」